

「ツハ山と逢坂城址」

楠本 績(穴虫)

「香芝」の住民となり、早いもので、すでに四半世紀を越えようとしています。

逢坂でおおむね十年、穴虫(ツクダ)に十五年余と、いつの間にか書寿を前に、この地が終熄(収束)の土地と認識せざるをえなくなっていますが、今一これだけで良いものかと、自問の日々が続いているのが現実です。

逢坂在住の頃から、土いじりの好きな愚妻の供で「ツハ山」や「旭ヶ丘」に、腐葉土・集めにいったものだが、いつの間にかその楽しみがなくなろうとしています。

善し悪しの判定は、歴史が語ってくれることでしょうか。それにしても「ツクダ」といって「ツハ山」といって、更に近辺には、「シモンク」「シリマキ」「ウシロ」等と片仮名地名が多く見られます。

とっついて片仮名地名等が多いのだから、知りえたる限りでは、『仮名・仮字』とは、カリナの音便(国語学の用語。発音上の便宜から、もとの音とは違った音に変わる現象で、>咲きてく>が>咲いてく>、>早く>が>早うく>になるたぐい。一般に、イ音便(>「き」「ぎ」「し」「り」の子音k・g・s・r)が脱落し音となる現象で、「聞きて」「聞いて」「次ぎて」「次いで」になるたぐい。(ウ音便)>く>「く」「ひ」「み」の子音k・g・n・b・mが脱落

u音となる現象で、「白く」が「白つ」、「戦ひて」が「戦うて」となる類。(・撥音便)おもに動詞活用語尾の「に」「ひ」「み」「り」が撥音になる音便で「飛ひて」が「飛んで」になる類で、はねる音便。(・促音便)主に活用語の連用形の語尾の「ち」「ひ」「り」が「て」「た」などに連なる場合、「立ちて」が「立つて」、「言ひて」が「言つて」となる類。(の四種がある。)「カシナ」のつづめ(約)であって、広義には万葉仮名・草仮名・平仮名・片仮名をいい、狭義には、平仮名・片仮名といわれています。

万葉仮名は、漢字を、本来の意味を離れ、仮名的に用いた文字(主に漢字の音訓を国語で写した文字)で、平仮名・片仮名は平安初期、万葉仮名をもとにできたものとされています。

平仮名は、漢字の草体からつくられた草仮名を、更に崩して作った音節文字。片仮名は、阿→ア、伊→イ、宇→ウ、久→ク、コ→コ、のように漢字の一部を取って作ったものであります。

七世紀の朝政に、大きく関わった大津皇子ゆかりの地としては、片仮名地名が多くて当然といえるかもしれませんが、余りにも難解な字句には想像(創造)を越えるものがあります。有名な「キトラ」にしても、奈良県には三ヶ所の地名があ

ると聞きますが、「キトラ」って何ですか?という問いに対しては、専門家においても、答えが出ていないのが現状で、「時期」「北浦」「亀虎」と記された資料にもめぐり合いました。

中和幹線建設に伴い、「ツハ山」の中央部を横断する形で道路が敷設されることとなりました。「ツハ山」一帯が岡氏(出自は平安時代、中世から近世にかけて、現世の香芝市・中南部が勢力範囲)の城の一つである、逢坂城址と比定されている経緯もあって、逢坂城跡発掘調査が、平成十一年二月一日～六月十九日に、実施されました。それによれば「江戸時代の遺構や遺物を検出したものの、当初予想された濠跡や土塁、曲輪等の戦国期の争乱を物語る城郭関連遺構は検出することができなかつた。また出土遺物はいずれも岡氏一族の生存・存続時期(十二世紀後半～十六世紀中頃)以降のものであり、遺構や遺物からみても当丘陵上に城郭に関わる遺構が存在した可能性は低いものと考えられる。」と、報告されました。今後とも城郭関連遺構の予想される地域での綿密な分析調査をはじめ、文献資料も含めて慎重に調査を進めていく必要性を感じました。